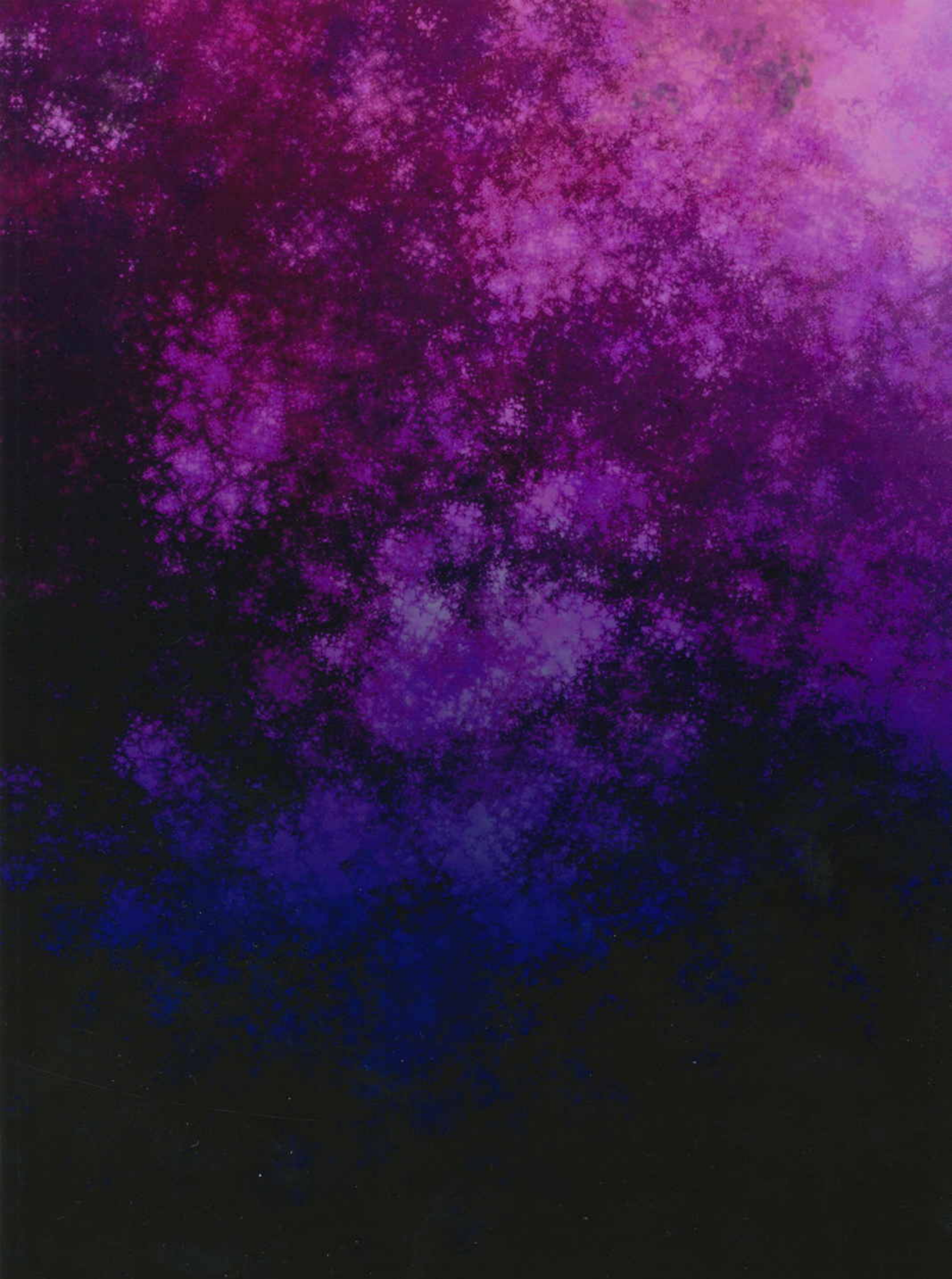


MIND SLAYER

PRESENTED BY GFF



DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止



2014.8.17

登場人物紹介



明の明星のエリス

宇宙に名を轟かす爆乳宇宙海賊。
宇宙船「ヴィーナス号」で宇宙を駆ける。
露出度の高い格好をしているが
弱きを助け強きを挫く義侠心に溢れる女性。
多くの女性から尊敬もされている。
その美貌から本編中で求婚されたこともあるが
パトスピ勝負で勝利し「宇宙では男は茶番」と言い放った。
パトスピアニメシリーズで随一の主役級女性キャラでもある。



リクト・エイブリル

本誌の竿役。
主人公レイ、姉のライラと一緒に宇宙を旅する
CVくぎゅのショタ。
祖父のデイヴィットはエリスの父親とライバルであり
幼少期のエリスからよく慕われていた。
多分年上キラー。



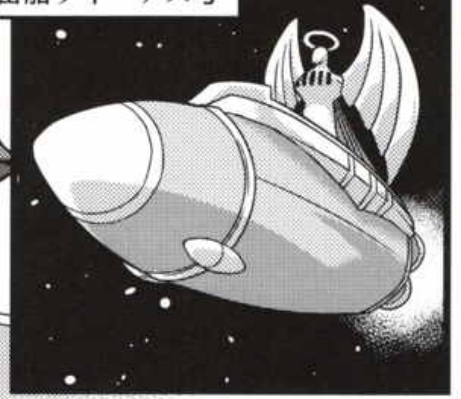
ガルボ

エリスの部下。
ヴィーナス号のクルーでは
ナンバー2らしい扱い。
お嬢様口調で話すプライドの
高そうな貧乳女。

マレーネ

エリスの部下。
ヴィーナス号の操舵を任されている
東北弁の少女。実質ナンバー3扱い。
本誌では名前だけ登場。

宇宙船ヴィーナス号



「騒がしいな…どうした？」
「あっお頭…それが廊下に何かを
こぼしたようなシミができていて…
誰に聞いてみても心当たりはないそうです」
「天井から何かこぼれたということ
でもなさそうだな」
「はい、それに…ちょっとニオイが…」
「む…そうだな…廊下なら監視カメラに
何か映っているかもしれん
私が見てこよう」

「昼までは何も映っていないな…
やはり夜か…この時間は全員
就寝中はずだが……
むっ…誰か歩いてくるな…
……これは…私…!?
そんな…馬鹿な…！」



—翌日

「お頭！また昨日の場所に…今度は…」

「これは…なんだ…？」

「わかりません…

なんだかぬるついてる感じがしますが…」

「…私が映像をチェックしてくる

それには一応触らないように

言っておいてくれ

40...



「昨日に続いて今日も…！」

何が起きているんだこの船に…私に…！」

……やはり…また私が映っている…

あの妙なモノも私が持ってきたようだな…

…裏面が吸盤のようになっているのか…

あれで床面に…それでなにを……!？」

ん

「な…まさか…！う…嘘だ…
私が…廊下でこんなことを…
あの液体は私の……クソっ!!
寝ぼけて…でこんなことを
するわけがない…!
誰かが私を操っているとしか
考えられん…一体誰が…
どんな方法で…?
……とにかくアレを
回収しておかねば…」

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

「お頭…何か情報は…」

「…いや…今回も何もわからなかった…

コレは…私が預かっておこう…

掃除も…私がしておく…」

「お頭…？わかりました…」



「コレが…あんなことに使うモノだったなんて…
とにかくどこか人目につかない場所に…
私の部屋の引出しの奥にでも…なっ!?
どういことだ…これは一体…!
何故私の部屋にこんな…同じようなものが沢山…!?
ここにあったものを私が…持ちだしたのか…?
私が…これ…を……………」

「……………そうだ…使ったものは
ここに片付けておかないと…
『今使っているモノ』も片付けてしまおう…」

「んんっ…あっ…はあ～っ…♡
昨日は…二穴でしていたらケツ穴が
コレを飲み込んでしまったまま…♡
達した後呆けて寝てしまったからな…んっ♡
私としたことが…情けないっ…んひっ♡
んほおおっ♡はっ…! ああっ…♡出てきたっ…あはっ♡
いい…っ♡おほおほおほおほおっ♡
ケツっ♡クソ穴から極太ディルド出るっ♡
おほっ♡おほほほおほおっ♡
この脱糞感っ♡あっはあっ…擬似ウンコ最高おっ♡
ははあっ…ぶびぶび言ってるっ♡
湿ったオナラあっ♡下品な音お…ふっ…ふひひひっ♡
あっ…あっ…全部で…でりゅううううっ♡」

「ふう…ふふっ…なんとかヒリ出せたな…
一晩ケツ穴で熟成されてすごいニオイだな…
んはあ…また興奮してしまう…♡」



「……………ん……? 私はベッドで何を…
そうだ…あの道具をしまうために部屋に
来たのだった……疲れているのか…?
……いかなんこんなことでは…
今日は船の中をくまなく調べてみよう
場合によっては監視カメラの増設も
考えなくてはな…
このまま問題がエスカレートすれば
クルー達に隠し通すのも難しいだろう…
早くなんとかしなければ…」



翌日
「今日は何にか異常はあったか？」
「いえ、今日は何にも」
「ふう…そうか…」
「なら皆はいつもどおりにしていてくれ
私は一応映像を確認しておこう」

「昨日から私の部屋にもカメラを設置したが
そのおかげで何も起きなかったのか？
それでも根本的な問題は解決していないが…
廊下…はなにも映っていないな
私の部屋は…私が…いない…!?
やはり何かが起こって…戻ってきたな…
私…とリクト…だと？」

『こんな夜中にどうしたのエリスさん？
ボク眠いよ…』
『そこに座って服を脱ぐんだリクト』
『服…？うん…』

「なぜリクトの服を…まさか…やめろ…！」

『あれ…エリスさんも脱ぐの？うわっ！』
『フフ…お前は今から私に
食べられるんだ…♥』
『食べる…？何言ってるの
エリスさ…うわっ…そこは…！
あっ…大きくなって…』
『小さくても男だな…
それに立派なモノを
持っているじゃないか…♥』
『…よくわかんないけど
ときどきこんな風に
ちんちんが大きく？
なるときがあるんだ…』
『ほう？フフっ…♥
それはどんなときだ？』
『エリスさんがボクのそばで、
屈んで…おっぱいが目の前に
来た時とか…』
『私のカラダを見て欲情していたのか
嬉しいぞリクト…ほら…
好きに触ってもいいんだぞ♥』
『エリス…さん…』

「やめろ…やめてくれ…！
リクトはデイヴィットの孫なんだぞ！
あ…ああ…悪夢だ…こんな…」

『いいぞリクトおっ♥
チンポっ♥奥まで突っ込んで…あはあっ♥』
『はあっ…はあっ…エリスさんっ…
ボク…なんか出そうだよっ…！』
「やめろ…それ以上は…！」
『いいぞっ♥中につ♥私のマンコに出せっ♥
私を孕ませるつもりで射精してくれええっ♥』

「そん…な…馬鹿な…
現実…なのか…これは…
私は取り返しの付かないことを…くそっ！
…こんなことをして何故私は何も覚えていないんだ…
誰が…誰がこんなことを…
…リクトは…このことを覚えているのか…？」





「リ…リクト…」
 「あっエリスさんおはよう！」
 「ああ…おはよう…その…リクト
 昨日のことなんだが…」
 「昨日？昨日がどうしたの？」
 「…覚えていないのか…？私と同じ…
 ならばリクトも何者かに操られて…」
 「いや…なんでもない…すまない」

「それよりマレーネさん達が朝ごはんの
 用意が出来たって言うてたよ」
 「そうか…ありがとう
 …しかし今朝は食欲が進まなくてな…
 私はミルクだけでいい」
 「そう？じゃあエリスさんの
 部屋に行こっか」
 「ああ、頼む」



「はい、どうぞエリスさん」
 「今日も元気だなリクト
 んっ…んちゅるっ…んっ…んむっ…」
 (私だけでなくリクトにまで手を出すとは…
 一体誰が…どんな目的で…
 あんな破廉恥なことをこんな子供に…
 だがリクトがなにも覚えていないのは
 幸いだったな…完全に私がリクトを
 襲っていたように見えた…あんな体験…
 リクトのトラウマにならずに済んでよかった…)
 「そろそろ出そうだよエリスさん…！」
 「んふっ…いいろっ…らしてくれ…
 んっ…んぐっ…んぐふっ…んっ…
 んはあ…れろっ…いつも悪いなリクト
 美味しかったぞ」
 「このくらいならお安いご用だよ
 飲みたくなったらいつでも言うてねエリスさん」
 「ああ…朝食ができているんだらう？
 リクトも済ませてくれるといい
 しっかり食べないと大きくなれないぞ」
 「うん、それじゃあねエリスさん…フフら…」
 「…リクトだけじゃない
 この船の皆を守るためにも
 一刻も早く犯人を…」

それから1週間…
夜間私の意識外での異常行動は続いた——
寝ずに夜を明かそうとはもちろん考えたが
どうしてもいつの間にか寝てしまい…
拳句の果てに寝小便までしてしまっていた…

船内をくまなく調べても怪しい
装置などは見当たらず
部外者が入り込んだ形跡も
見つからなかった
騒動が起きてから惑星にも
停泊していない…
手がかりはなにも見つからなかった…
誰か他の者に頼るわけにもいかない
一体どうすれば…
「……日課のオナニーも捗らないな
日に日にディルドーの本数も増えている…
このまま問題が続けば私のマンコが
ガバガバになってしまう…」

この一週間はリクトも含め私以外が操られることはなかった…
だがいつ他のクルーが操られるかはわからない
しかしそれ以上に問題なのは心労でオナニーが捗らず
達するまでに使用する道具が増えていることだ
マンコを押し広げるような乱暴なオナニーでなくては
達しなくなってきている…このままではチンポを挿入されても
感じないマンコになるばかりがチンポを気持ちよくすることも
できなくなり精液を膣内に射精してもらえず孕めない身体に…
「最悪の事態だけは避けなくては……」

—数日後

「エリスさん最近疲れてるように見えるけど…大丈夫？」

「…ああ…少し悩み事が…いや、なんでもない
リクトに心配されるようなことはなにも…」

「夜のことで悩んでるの？」

「なぜそれを…！ なにか覚えているのか!？」

「覚えているの何もボクが全部やってることだし

この船に特殊なデッキを入れたら

船にいる人全員を催眠状態にして

好きなようにできるようになったんだ

「…な…なにを言っている…？」

お前が…私達を好きなようにだど…？」

(まさか…本当にリクトが…?)

どうしてこんなことを…

私達は同じ船の仲間同士…

…待て…そもそもなぜ女海賊の船に

リクトが…? いついつは

私の船に乗った…?)

「記憶も操作できるからね

ちょっとだけ思い出させてあげたんだ

今の今まで僕がこの船にいること疑問

にも思わなかったでしょう？」

「…どうやら本当らしいな

ただでは済まさないぞ…！」

「ただでは済まさない？」

アハハッ! そんな格好で

言われても

全然怖くないよ」

トキッ

「格好…? なにかおかしい…」

「フフフ…それじゃ

ちよつとずつ思い出させてあげるよ

最近毎朝…今朝もボクの精液を

朝ごはんのとき飲んでたよね?

二人のときもあつたけどみんなの前でもさ…

あれ普通だと思つてたでしょ？」

「朝…精液…そのくらい普つ…」

…うふっ! ゲホッ! ゲホゲホッ!

う…ぐ…まさか…こんなことが…

夜だけでなく…ずつと操られて…!？」

「そうだよ…今もずつとね

さっきから言つてるけどさあ

その格好恥ずかしくないの？」

「…? な…あ…! ? んっ…ごっ…!

私は…今まで何を…ぶごっ…あ…!

くっ…! み…見るな!!」

「エリスさん優しいから

ボクがプレゼントしたものは全部

ちゃんと身に着けてくれてさ

そんな格好で普通に何日も過ごして…

もう限界だよ…アハハハッ!」

「き…貴様…ッ!!」

「そんな怒らないでよ…まだまだエリスさんには

ボクのおモチャでいてもらうんだからさ…」

ムキッ

「…はっ!? ゆ…夢か…
まったくなんて夢だ…
いや…夢とはいえリクトを犯人に
仕立てあげるなど…犯人?
ふ…まだ寝ぼけているのか私は
リクトがこの船のクルーを自由に
操れることは当たり前だ
リクトが私達をどうしようと
何も文句はないはずなのに
夢ではそれが悪いこと扱われていた…
夢らしい支離滅裂さだな…馬鹿馬鹿しい」

ん…? これは…
リクトが私が寝ている間に
膣内射精していったのか
記憶を消されているだけで
私は起きていたかもしれないが…
まあどうでもいいことだな…
どれ…ん…ちゆるるるっ!
んぐっ…んん…っ
リクトの精液の味ではないな
リクトが誰か違う男を
この船に乗せて私に射精させたのか
たまにはリクト以外の精液もいいものだな
んちゆるるっ…んぐっ…私のマンコの熱で
まだ冷め切ってはないがやはり精液は
チンポから直接飲むのに限るな
とはいえリクトがせっかく
こんなに用意してくれた精液だ
しっかり全部飲み干さねばな…
んあ…ん…ちゆるるっ
ずちゆるるるっ
…まだまだマンコから溢れてくるな
味も様々だ…一体何人私に射精したんだ?」



どろっ



「フフッ…エリスさんを見てたら興奮してきちゃったよ」
「興奮？小便を飲む女がそんなに珍しかったか？ライラに飲ませたりしてなかったのか？」
「アレを女として見たことはないよエリスさんはどんな男の人が好み？」
「私の好みの男か…」
「背丈は私より小さく…年下がいいなそれでいて立派なチンポを持っていて私を見てそれをピンピンに勃起させてくれるような…そんな男が理想だな」
「フフ…そうなんだ、ボクなんてどうかなエリスさん？」
「えっ…？そ…そうだな…確かに…言われてみると…」
「ほら…勃起してきちゃったよエリスさんエッチだから…」
「あ…♥胸が…あんっ…苦しい…この気持ちは…リクト…今までお前をそんな目で見たことなかった…♥」
「チンポの大きさにも自信はあるんだほら、どう？」
「どうして今まで気づかなかったんだ…こんないい男が近くにいたなんて…♥す…好きだリクト…愛してる…♥好きで好きで仕方ないんだ…ああ…リクトお…♥」

はっ
はっ
はっ

は

はっ

はっ

は

はっ

はあっ

はっ

はっ

「ボクもエリスさんのこと好きだよ」
「ああ…嬉しい…！なら私とずっと一緒にいよう…！
そうだ！結婚しようリクト…私もエイプリルの女になろう！きっと父やデイヴィットも祝福してくれる…
そうしよう！そして子作りを…」
「はあっ…♥リクトの子供…考えただけで…♥」
「う…ん…結婚かあ…」
「い…嫌か…！？私のどこがダメなんだ…言ってくれ！
言えばなんでも治す！お前の…貴方のためならなんでも…♥」

はっ
はっ
はっ



— 1週間後…辺境惑星にて

「私の勝ちだな
銀河パトスピ法に則ってこの薬は貰って行くぞ」
「クソっ…カードクエスターのお前が
そんな薬に一体何の用が…」
「黙れ、お前達のような
屑には関係のないことだ」

「お頭…さっきのブローカーではありませんが…
その薬をどうするつもりですか？
ここ最近はどういった薬物取引をしている
悪党ばかり狙っていますが…」
「薬は私が責任を持って処分している
だから安心しろ
こういった組織は短期に一網打尽に
したほうがいだろう」
「それはそうですが…そういった仕事は
他の治安組織などに任せればいいのか？
…それにこの者達が取り扱っている薬の中に
違法豊胸剤というのがある…その…
クルー達の間で…最近お頭の胸が…
大きくなってると噂が…」
「私とその薬物を使用しているのでは
ないかと言いたいのか？
その薬目当てにブローカーを狙っていると…」
「…そう考えているクルーは少なくありません」
「…薬を使っているなにが悪い？」
「まさか…本当に…!?
なぜそんな…お頭はもともと…」
「私の想い人がそうしろと言うんだ
私も一人の女だ…恋に生きてもいいだろう」
「お頭がそんなことを言うなんて…
想い人のことは存じ上げませんが
薬に頼るなんてきつとその方だつて
悲しみます…!」
「手術で造った乳よりいいだろう
お前達も使うか？余った薬なら
クルーで好きに使って構わないぞ」
「結構です…!
クルーの皆もそう言うはずですよ…」
「そうか…他にもいろいろと
便利な薬が揃っているのだから」
「お頭……」

「このおっぱい…」
「あはあんっ♥
胸の大きさには自信があるんだ…
貴方の好きにしていんだぞ…♥」
「このくらいの大きさじゃ普通だよ」
「なっ…そんな…リクトはもっと
大きい方がいいのか？」
「そうだね…普通に生活できない
くらい大きなおっぱいが好きかな～
エリスさんも十分大きいとは思うけど…
もっと同性からも異性からも引かれる
くらい大きいおっぱいならなあ…」
「わかった…私の胸がそのくらい大き
なったら…また貴方に告白しよう
それまで待っていてくれ…リクト…」
「フフっ…考えておいてあげるよ」





「リクトっ! どうだ私のこの乳は?
こんなに大きくなったぞ…フフ…これで貴方も私を…」
「ほんと頑張ってくれたねエリスさん
一度船の中で暗示をかけてやれば
外でも有効みたいで…フフフッ
他のみんなには何もしてないからエリスさんの
行動にはみんな困ってるみたいだったけど」
「他のやつらなどどうでもいい! 私を…私だけを見てくれ…
見てくれこの乳を♥どうだ…化け物染みた大きさだろう…
いろいろ便利な薬があつてな…こんな大きさでも
感度はよくて柔らかさやハリもキープしているんだ!
すべて貴方のために…♥」
「そうだね…でも…大きいだけじゃね…
ボク母乳が出るおっぱいが好きなんだ」
「母乳…? そういう薬もあったはずだ! じゃあ今から…」
「だめだめ…薬じゃなくて自力で出せるようになってよ」
「自力…私に妊娠しろ」と言うのか…?
そ…そういう意味なのか…? それなら喜んで…!」
「あ…違う違う…ボクじゃなくてさ
ボク以外の誰でもいいから誰かの種で孕んできてよ
「な…そんな…リクト以外の子供なんて…」
「それじゃあエリスさんとはこれまでだね」
「ま…待ってぐれ! できる…孕む! 妊娠する!
種付けされてくるから…頼む…私を捨てないでくれ……」
「よかったあ…じゃあ期待して待ってるよフフフッ…」

「お頭…バカンスはいいのですが
よりもよってここ…惑星ヌーディストの
ビーチというのは…あまりに危険では…」
「ああ…だから私だけここで降ろしてくれ
皆は私が用意したプライベートビーチに
行っていいればいい
夕方ごろに迎えに来てくれ」
「…このビーチがどういう場所か
わかった上で行かれるのですね…」
「ああ、そうだ」
「わかりました…お好きにどうぞ
夕方ごろ迎えに行きます」
「フフッ…楽しみだな……」
「……もう私が尊敬していた
お頭はどこにもいないのですね…」

たっ
っ

「おい…あれ明の明星のエリス
じゃねえのか？」
「本物か？なんだよあの胸…
あんなだったか？」
「おいこづち来るぜ…逃げるか？」
「でも俺たちを懲らしめようって
雰囲気じゃないような…」
「おい…そこの男達
なにを突っ立っているんだ？」
「え…？なにをって…」
「ここは3歩あるけば5回は犯されると
評判のビーチと聞いている
そこにこんなカラダの女が来たのに放っておくのか？」
「……何言ってるんだお前？」
「犯してほしい、と言っているんだ
精液はできるだけ膈内に射精してくれ
私はとにかく妊娠したいんだ」
「おいおいおい…マジかよ」
「なんかいろいろおかしい気もするが…見逃す手はねえよなあ」
「確かにここは性の楽園だけどよお…
お前みたいな直球の変態は初めてだぜ…フへへ…」
「さあ…誰でもいいから早く私を孕ませてくれ…♥」
(待っていてくれリクト…貴方のためなら
私は娼婦以下の色情狂にでもなろう…)

たっ
っ



—同日夕方
惑星ヌーディストのビーチ

「んあ…そっちは…んあはあ…っ♥」
「今更マンコだけなんて冗談だろお？
俺らの好きにさせろや便器女が」
「おーいまだコイツとヤッてないやついるかあ
この機会にヤツとかなないと損だぜ…ん？」
「おい…あれこいつの仲間じゃないか？
こいつとは雰囲気違うぜ…助けにきたんじゃ…」
「みただな…ずらかるとするか…
おいエリスさんよ、またやりたくなったら
いつでも来いよなへへへッ！」

「…酷いニオイ…お頭、迎えに来ましたよ」
「…フ…フフフッ…フフ…」
「…フン…駄目みたいですわね…
皆、この『汚物』を船に運びまじょう
それでこの女どもお別れです
触れるのも嫌でしょうけど最後の仕事と思って
我慢しまじょう」

「…これだけ出されれば…大丈夫…
フフ…リクト…待つて…くれ…
フヒッ…フフフ…」

ぽんぽん



ぽんぽん

びん

びん

どろお



「リクトっ!!リクトリクトお〜っ♡
出たっ出たんだあっ♡母乳っ♡おっぱいがあっ♡」
「ああ、妊娠さえ確認できたら成長促進剤飲んでも
いいとは言ったんだけどほんとに使ったんだ」
「ほら見て、ぐれえ♡フン♡ツ!!んほおおおっ♡
こんなにいっぱい♡これでいいだろう!!リクトお…♡
もうクルニは全員降りてしまったしヴィーナス号は
二人だけの船だ♡ここでずっと二人で…♡」
「聞いたよエリスさん?妊娠確認できるまでいろんな星で
バメまぐつてたんだって?オマンコガガバなんじゃないの?」
「大丈夫だリクト♡私はただのヤリマン女じゃない…
貴方のチンポを迎えるためにそうならない薬を常に飲んであるんだ
気持ちいいセックスの方が子供ができやすいとも聞いたので
膣内の感度も極限まで高めてある…もう私のカラダは全身が性具だ♡
全て貴方のためのお…♡ふふっ…ふふふっ♡」

「そっか…じゃあチンポを挿入されたら
元のエリスさんに戻ってもすぐ堕ちちゃうってことだね♥」
「そうだ! どんな汚らしい男に
犯されるかもわからないからな…
どんなチンポ相手でも大丈夫なよう…に……
…ん……リクト…? どうしてここ…
…私……ひっ……!?!
な…な…なんだ…このカラダは…
あ…ああ……!?! 嘘だ…! 嘘だこんな…
これが…私の……」
「『ボクに抵抗できない』ってこと以外は
催眠を解いし記憶も戻したよ…どう?
エリスさん、今でも僕を愛してる?」
「きっ…貴様ああああああああ!!
絶対…絶対に許さないっ!!
クソっ…身体が重い…言うことを聞け…!
クっ…おのれええ……っ!」

あ…

あ…



「や…やめろ…こっちに来るな！それを…私に近づけるな…やめてくれ…！
誰か…誰か助けてくれっ！！ガルボ！マレーネ！『ショコラでもいい！』
「みんなエリスさんに愛想尽かして出て行っただけでしょう？
いてもこの船じゃボクには逆らえないから無駄だって
それにもうオマンコぐちょぐちょだよ？
自分のおっぱい搾って相当感じてんだ
「うるさいっ！黙れ！お前の催眠と…薬のせいで…！
やめろ…ソレを私に近づけ…んはああああんっ♡」

おっ♡

おまっ♡

「あれ？まだチンポに触れてもないのに
イッチャったの？」
「はっ…あっ…♡はっ…はあっ…ソレ…っ…
触らなくても…温度を感じるだけで…
んひいっ♡カラダが…っ♡
離せっ…はやくっ！」

「…それじゃあこれ挿入したら
どうなっちゃうんだろうねえ…ホラっ」
「あぶうっ♡ちよ…ちよくっ…♡
触れたりっ…したらっ♡あひっ♡んぐふっ♡
ぐきっ♡っひいっ♡」

「アハハッ！すごいねえ…まだくっつけた
だけなのに…ほんと面白いな…っ！」
「んひよおおおおおっ♡おっ♡おおおっ♡
おっ♡はいっ…おほおおっ♡ぬっ…ほおっ♡
ぬいでっ…ぬっ…♡ふっ…♡ふうっ♡」

「抜けばいいの？ごう？」
「あひいっ♡うっ♡うふっ♡うごっ♡
うごかないれっ♡ほっ♡んおほほおっ♡」
「そう言われても動かなきゃ抜けないよ？」
「うっ…♡うふっ…♡ふっ…♡うっ♡」

(どうすればいいんだ…
このまま挿入されたままでもこの絶頂感は
止まらない…とはいえ動かれたら…恐らく
抜くまでの一瞬でも私は…壊れてしまう…！
そんなのいやあ…！あ…あ…だめ…だ…
もうアタマ…働かなく…気持ちいい…
気持ちよすぎて…)

「このままじゃエリスさん壊れちゃうねえ…
正直ボクも壊れてないエリスさんの方が
いいんだけど…」

「はっ…♡はあっ…はあっ…あ…っ…」
「実はエリスさんが薬漬けになってた
あたりから快感をセーブするように
催眠でリミッターをかけてただ
それを外したらこの有り様…
どうするエリスさん？ボクの催眠に
依存してこれから生きていくか
それともここで完全に発狂して
ヒトじゃなくなるか…ちなみに
一度完全に狂っちゃったら
多分催眠じゃ戻せないよ…フッフッ」

ほっ♡

おっ♡

「はっ…♡はつきよ…っ!?!ほおっ♡おっ♡おおうっ♡い…やあっ…!
いやっ…だ…っ!」た…たすげっ…あ…?快感が…収まって…
「今催眠をかけて少し調整してあげたんだ
そのままじゃまともに返答もできそうにないし…
強すぎる快感つてのも苦痛でじかないみたいだからね
二番ちようどいい快感はこんな感…じっ!」
「あっはおああんっ♡あんっ♡はっ♡あああっ♡
これがっ…調整された…かいっ…かんっ♡あっ♡んああっ♡
「気持ちいいってことを認識できる分さつきよりイイでしょう?」
「…こっ…こんな…私は…っ!」
「もうみんなエリスさんに幻滅して船出てっちやっただよ?
見栄張ってもしょうがないよ」
「……………」

「まだ経験してないからわからないだろうけどさ…
仮にボクがここでチンポ抜いて解放してあげても
そのカラダじゃ僕の催眠なしでは普通に生活なんて無理だよ?
多分そのうちその辺の男に犯されて
結局イカレちゃうんじゃないかな
そうじゃなくてもオナ狂いのメスザルになるだけだよ
食事や睡眠より性欲を優先してオナニーしながら
死ぬんだろうね…フフフツ、もう人間として
完全に終わってるね」
「……………そんな……………」
「さあどうする?ありのまま、催眠ナシの
エリスさんの答えを聞かせてよ
知らない男と発狂か
オナ狂いのメスザルになるか
それとも……………」

「……………わかっ…た……
お前の…オ…オモチャに…なろう…
…好きにすればいい…もう…
それしかないんだろう……」
「好きにすればいい、じゃないだろ?
もうお前はボクのおモチャなんだから」
「なっ……!?!」
「今ボクにしてほしいことがあるんでしょ?
チンポ抜いてあげるからこっちにケツ向けてさ
跪いて言ってみてよ」
「……お前の……」
「言い直して、『リクト様』」
「……………リクト様の…オチンポで……
催眠で調整された…快感を…味わわせて欲しい…です…」
「ハハハハハッ! 明の星のエリスもカタナシだね
次からはもっとエッチに言ってよね?フフフツ」

「それじゃ挿入れてあげるよ…ほらっ!!」

「んっ…はあああ…っ♡」

「もうちょつとゲツ落として僕まだ小さいんだからさあ」

「……はい…んふううっ!?うっ♡おほっ♡おほあ…っ♡」

「そうそう忠実にしてれば気持ちよくなれるんだよ」

「そんな嫌がることじゃないでしょう?」

「んっ…♡ふうっ♡ふあっ…♡」

「そんな声我慢しくなくてもいいんだよどうせ誰もいないんだからさあ」

「あっ…んっ…♡だが…んはああんっ♡」

「他のみんなは酷いよね」

「ちょっとエリスがエッチなことしたくらいでを軽蔑して見限ってさ」

「……あふっ…♡ん…っ♡」

(そうだ…もうこの船には…私を慕ってくれる仲間ももう誰もいない…)

「ボクは今のエリスも好きだよ♡ボクならどんなエリスになっても味方でいてあげる」

(……リクト…リクトしかいない……)

「こんな姿を晒す私を…好きでいてくれる…」

「なによりこの快感を…」

「だからボクの前では全部を曝け出してよ」

「ほらっ!!気持ちいいでしょう?」

(リクトの…リクト様の前の私が)

今の私の全て…

今までの私は…全て私自身が

壊れてしまったんだ…

それなら…それなら…)

「…いいっ…♡」

「きもち…いいいいっ♡」

「リクトっ…♡」

「リクト様のチンポ…」

「きもちいいですうっ♡」

「もっ♡もっ♡とお♡」

「もっ♡とシてえっ♡♡」

「アハッ! やっと素直になった」

「持ち前のプライドが邪魔してたのかな」

「はいっ…でももうっ♡」

「もう! どうでもいいっ♡」

「私が信じてた正義なんてもうないっ!」

「仲間もいないっ!! なら私なんて…」

「どうでもいいっ♡イっ…いまのっ♡」

今のこの快感だけが…

私のっ…私のお…♡

「イキがなんだあっ♡♡」

「…じゃあ昔の記憶を

消してあげようか?

「そのほうがきつともっと

気持ちよくなるよ…」

「記憶を……!?!」

「あうんっ♡」

「昔の自分なんて

邪魔なだけでしょ?

全部忘れてさ…

生まれ変わって

気持ちよくなろうよ」

「……いらないっ…」

「いらないっ!! は…ははっ♡」

「記憶なんていらないっ♡」

「消してっ♡消してくださいっ♡」

「リクト様のオモチャになった後の

私だけでいいっ♡昔の私なんていらないっ♡」

「あはははっ! そうだいらないっ♡これでスッキリするっ♡」

「ははっ♡全部忘れればいいんだっ♡ふっ…ふひっ♡あははははははっ♡」



—数日後…宇宙船ヴィーナス号

「この船も久しぶりですわね…」
「ようこそガルボさん
まさかガルボさんから連絡してくるとは思わなかったよ
もうお頭のこと見限ったんじゃないの？」
「…リクトには関係ありませんわ
まず通信した時も思いましたが何故あなたがこの船に…
それにこの…ひどい悪臭はなんですか？生臭いような…
ライラや一番星とは一緒じゃないのですか？
この船を散らかされるのはあまり…」
「ああ、ボクのベットがちょっとね…」
「ベット？それよりお頭…いえ、明の明星のエリスは今どこに？」
「なるほど…その様子じゃ暗示も解けちゃってるみたいだね
冷静になって考えたらエリスの様子がおかしいことに気づいて
心配で戻ってきたわけだ…フッフ」
「暗示…？何を言ってるのですか？」
「すぐにわかるよ…それじゃお頭と合わせてあげる
エリス、出ておいで」

「あはあ～ん♥待ちくたびれちゃいましたあ♥
お客さまいらっしやいませえ♥ようこそヴィーナス号へ♥
…あら、女の子？」
「お…お頭…!?その格好は…一体…！」
「おかしらあ？何のこと？はじめましてえ♥
私はリクト様の忠実なしも・べ♥
牝牛のエリスっていうのよろしくね♥」
「…な…なにを…言って…私がわからないんですか…？
やはりなにかされ…まさか…！」
「リクト様あ、この貧相なカラダの娘が新しい奴隷になるって仰っていた？」
「うん、そうだよ
こうしてのこのこやってきた人材なんだから有効活用しようと思ってね
確かにカラダは貧相だけど、エリスが持ってきてくれたクスリで
どうとでもなるよ」
「…どうやらアナタがお頭に何かしたと見て間違いないようですわね…
よくもこんな…タダじゃおかな…あ…うん…
あ…れ…？…い…意識…が…」
「悪いけどガルボさんにはエリスみたいに時間かける気ないからさ
ババッと意識改変して奴隷になってもらうよ
この調子なら他のクルーも戻ってきそうだしね」
「リクト様あ～ん…
他の女なんてどうでもいいじゃないですかあ♥
リクト様にはこの私が…♥」
「もちろん一番はエリスだよ
今はエリス1人に働かせてるけど
戻ってきたクルーの牝どもに客を取らせれば
2人の時間をもっと取れる思うんだ」
「ああんっ♥リクト様あ♥エリスは嬉しいですうっ♥
おじさまのチンポの相手も好きですけどお…
やっぱり愛するリクト様のが一番ですうっ♥」
「娼館船ヴィーナス号として営業できる日も近いね
軌道に乗ったらお姉ちゃんやレイも呼んでみようかな
フッフッフ…」



あとがき

栗林クリスです。この度は本誌をお手に取って頂き誠にありがとうございます。
今回は『最強銀河究極ゼロ バトルスピリッツ』(ながい)の明の明星のエリス本です。
ペーパー、コピ本と描いてるうちにどんどん好きになって
今回ようやくちゃんとした本で出せました。
コミ1で配布したコピ本をお持ちの方はコピ本の内容を拡張したような
話になっているのにお気づき頂けたかもしれません。
また本誌のタイトル『MINDSLAVER』ですが
某マジックがギャザリングしたカードゲームをプレイしてる方は
元ネタがわかったかもしれないです。
現環境で言うと「Worst Fears」でもよかったですね。次の本のタイトルにしようかな。
同人誌のタイトルを某カードゲームからとってるという
某有名サークル様を思い出す栗林です。花の壁とか。

本文が完成した後にアニメ本編でエリスがミロクにボコボコにされたり
ミロクが記憶を操作できそうなことが発覚して
竿役はミロクでもよかったな~と思ったりしました。
本編のミロクが見せた女のプライドをズタズタにするような言動は
大体本誌でリクトにやらせてたので改めてアニメで見られてゾクゾクしました。
実際こういうときエリスはどういうリアクション、表情をを取るんだろうと
気になってはいたのでそれを確認できたのもありがたかったです。
あそこで涙を見せるような弱い女なら堕とす価値無しだったんですが
ほとんど理想通りでした。怒りに満ちた顔、デッキ捨てられた時の憂いと
絶望感が入り混じった表情がたまらなかったです。本当にありがとうございました。
あと記憶まで奪われなくてよかったです。もっともあそこで記憶奪ってたら
部下に物理攻撃で報復されてたかもしれません。

あとがき執筆時点ではまだわかりませんがエリスのエロい新フォームが
あったりしたらミロクと一緒にペーパーになってるかもしれないです。
その時は差別化のためにもうちよいハードな肉体改造も施したいと思います。

8月末にはバトスピのアニメ次シリーズが発表になりますが
アルティメットのプレイヴが出るとのことなので、ダン→プレイヴみたいに
世界観据え置きで、時とともによりセクシーになったエリスに引き続き
活躍して欲しく思います。その時はまた本を出せたらいいなと思います。

以上バトスピの話ばかりでわからない方には申し訳ありませんでした。
今後共サークルGFF、栗林クリスをよろしくお願いします。

栗林クリス

発行日 2014/8/17
発行 GFF/栗林クリス
印刷 ねこのしっぽ
E-Mail qlinicx@yahoo.co.jp
pixivID 612101

※無断転載・無断複製、及び未成年者の購読・閲覧を禁じます